

千葉県八千代市

# 白幡前遺跡 h 地点

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2020

株式会社オカムラホーム

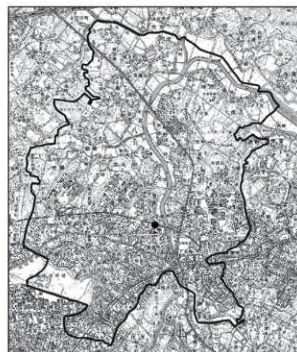
八千代市教育委員会

## 凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が令和元年度民間開発等埋蔵文化財発掘調査事業として実施した発掘調査の報告書である。報告書作成作業は令和元年度事業として行った。
2. 本書に収録した発掘調査は、宅地造成に伴うもので、事業者である株式会社オカムラホームの委託を受けて実施した。
3. 遺跡名は、白幡前遺跡、所在地は千葉県八千代市萱田字上ノ台2127番1.2126番である。
4. 調査及び整理は、以下のとおり実施した。
  - 確認調査 白幡前遺跡h地点として実施した。
  - 期間 平成30年11月22日～12月3日 面積 72㎡/712㎡
  - 本調査 期間 平成31年4月15日～令和元年6月28日 面積300㎡
  - 本整理 期間 令和元年11月22日～令和2年3月31日
5. 遺構No.は、数字と記号(アルファベット)の組み合わせで表記した。記号は以下のとおりである。
  - 竪穴建物跡 D 土坑 P 溝跡 M
6. 遺構・遺物の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - [遺構] 竪穴建物跡・道状遺構 1/80 炉・カマド・ピット・溝 1/40
  - [遺物] 土器 1/3 縄文土器 1/2 石器・石製品・土製品・鉄製品 1/1
7. 遺構実測図中の一点破線は火床範囲。遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器を表し、中軸線の両脇の空きは、復元実測を表す。
8. 参考文献は第3章末にある。
9. 出土した遺物のほか、写真・図版等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
10. 本書の図版作成は、調査補助員と宮下が行い、編集・執筆は宮下が担当した。



八千代市の位置



白幡前遺跡の位置

(国土地理院発行5万分の1地形図に加筆・編集)

# 目 次

凡例

目次

挿図目次

写真図版目次

第1章 調査経過及び概要

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査の概要…………… 1

第3節 白幡前遺跡の概要…………… 1

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代…………… 6

第2節 古墳時代…………… 8

第3節 奈良・平安時代…………… 13

第4節 中・近世…………… 15

第5節 遺構外出土遺物…………… 17

第3章 成果と課題…………… 18

写真図版…………… 19

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 白幡前遺跡と周辺の遺跡…………… 3

第2図 大正時代の白幡前遺跡周辺…………… 3

第3図 白幡前遺跡調査地点…………… 4

第4図 白幡前遺跡h地点遺構配置図…………… 5

第5図 03D遺構実測図…………… 6

第6図 03D・02D・西調査区出土  
縄文時代遺物…………… 7

第7図 02D遺構実測図…………… 8

第8図 02D炉土層断面図…………… 9

第9図 02D出土遺物…………… 9

第10図 01D遺構実測図…………… 10

第11図 01Dカマド実測図…………… 11

第12図 01D出土遺物(1)…………… 11

第13図 01D出土遺物(2)…………… 12

第14図 01M出土遺物(1)…………… 13

第15図 01M遺構実測図…………… 14

第16図 01M出土遺物(2)…………… 14

第17図 01P出土遺物…………… 15

第18図 01P遺構実測図…………… 16

第19図 02P遺構実測図…………… 16

第20図 道状遺構実測図…………… 17

第21図 遺構外出土遺物…………… 17

## 写真図版目次

図版1 遺構1(調査区全景・03D全景・03D炉・02D全景・02D炉)…………… 19

図版2 遺構2(01D全景・01Dカマド・01M・01P・02P・道状遺構)…………… 20

図版3 遺物1(01D出土遺物・01M出土遺物)…………… 21

図版4 遺物2(01M出土遺物・02D出土遺物・03D縄文時代遺物・  
01P出土遺物・遺構外出土遺物)…………… 22

# 第1章 調査経過及び概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成30年7月3日付けで、長岡敏雄氏から萱田字上ノ台2127番他の宅地造成に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の依頼が提出された。確認地は、周知の遺跡である白幡前遺跡の範囲内であることから、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）、は、「周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと、「その取扱いについて協議したい」旨をそれぞれ回答し、合計712㎡について取扱いに係る協議を行った。その結果、長岡氏は工事を進めたいとのことであり、発掘調査を行うこととなった。同年7月24日付で長岡氏から土木工事の届が提出され、市教委は11月22日に確認調査を開始した。

**確認調査** 確認調査は、平成30年度市内遺跡発掘調査事業として国庫及び県費の補助を受けて行った。白幡前遺跡h地点として対象面積712㎡のうち72㎡を調査した。その結果、発掘調査により竪穴建物跡4棟を検出した。

**本調査** 確認調査の結果、約300㎡について協議範囲とし、本調査実施に向けて協議を重ねた。協議の最中、長岡氏より事業を株式会社オカムラホーム 代表取締役 金子保夫氏に引き継ぐ旨申し出があり金子氏を事業者として引き続き協議を行った。市教委は平成31年1月7日付で調査の見積りを事業者に提示し、事業者からも同年3月28日付で八千代市長（以下「市」という。）に調査依頼書が提出された。市は同年3月29日付でこれを受託した。平成31年4月8日付で市と事業者間で本調査の委託契約を締結した。同年4月15日に市教委が本調査を開始した。

## 第2節 調査の概要

本調査は、遺構を検出した周囲300㎡を対象として行った。記録保存の範囲と崖が近接することから、作業中の安全確保のために崖からの距離をとり調査区を設定したため、協議範囲よりやや狭い調査区となっている。表土については重機により掘削し、適宜写真撮影と図面作成、トータルステーションによって記録をとりながら完掘を目指した。調査区域が2か所に分かれるため、01Dが所在する東側の調査区を東調査区。そのほかの遺構が所在する西側の調査区を西調査区と呼称する。

調査経過は、4月15日機材搬入、環境整備、調査前状況写真撮影。4月17日から18日にかけて重機による表土掘削。遺構確定及び遺構にかかる切株の除去等の後5月14日より竪穴建物跡等の遺構調査に移行した。トータルステーションによる遺物取り上げ及び平面図作成等を並行して行い、随時写真撮影等により記録を行った。個別の遺構調査終了後に全体写真撮影を行い、6月28日機材を撤収し、調査を終了した。

## 第3節 白幡前遺跡の概要

**遺跡の立地** 白幡前遺跡は、市域の中央、ゆりのき台及び萱田地区にある。南北を新川から延びる2本の谷津に挟まれた標高12mから24mの台地及び河岸段丘上に位置する。調査地点は遺跡の南端に位置し、谷津を南に臨む台地上平坦面、標高20m前後に立地する。調査区の南端は比高差約5mの崖で、西端も、道路が谷津を渡り台地上へと登る地点にあたるため切通状になっており、東端も調査区の南側を東西に走る旧道から分岐し、崖上へと延びる赤道により切通状になっていることから、調査区の東西南が崖面となる。

**これまでの調査** 萱田地区の遺跡については、昭和50（1975）年11月～12月に萱田地区特定土地区画整理事業（現ゆりのき台）の一環として事前準備の分布調査が財団法人千葉県文化財センター（現公益財団法人千葉県教育振興財団）によって実施され、遺跡分布状況が確認された。昭和54（1979）年には現在のゆりのき台の一角が萱田遺跡として認識された。昭和58（1983）年の八千代市教育委員会（以下市教委）による埋蔵文化財包蔵地所在調査報告の時には、萱田遺跡は分割され、現在の白幡前遺跡の内、権現道より西側を白幡前遺跡、東側を上の台遺跡と呼称した。

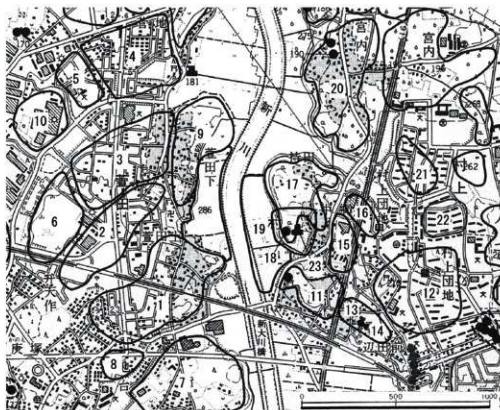
これらと前後して、昭和54年8月から昭和63（1988）年9月にかけて、萱田地区特定土地区画整理事業の実施に伴い、白幡前遺跡の内94.026㎡が財団法人千葉県文化財センターにより調査が行われた。その結果、縄文時代を除く旧石器時代～平安時代の遺構・遺物が多数検出され、特に奈良・平安時代は堅穴建物跡279棟、掘立柱建物跡150棟、瓦塔などの仏教関連の遺物や多数の墨書土器など豊富な成果であった。この内、人面と「丈部人足召□」と書かれた墨書土器は八千代市指定文化財となっている。

上の台遺跡では、平成2（1990）年12月～翌年8月に東葉高速鉄道の建設に伴い1.935㎡が財団法人千葉県文化財センターにより調査され、奈良・平安時代の堅穴建物跡17棟などが検出された。

平成9（1997）年に埋蔵文化財分布地図の改訂に伴い上の台遺跡は白幡前遺跡に統合された。

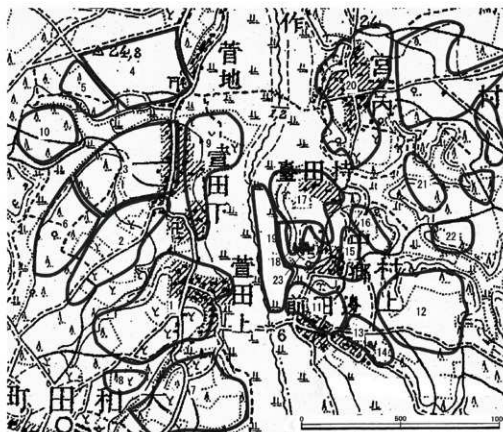
その後市教委による調査として平成13（2001）年に遺跡北部でa地点1.498㎡、b地点214㎡が調査され、奈良・平安時代の堅穴建物跡19棟、掘立柱建物跡6棟などが検出された。平成20（2008）年には遺跡中央部でc地点311㎡が調査され、奈良・平安時代の堅穴建物跡4棟、溝跡1条などが検出された。平成25（2012）年には遺跡北部でd地点が調査され、縄文時代の堅穴建物跡2棟、奈良・平安時代の堅穴建物跡5棟・溝跡1条などが確認された。平成26（2013）年、遺跡東部の新川低位段丘面上でe地点の調査が行われ、中近世の掘立柱建物跡1棟や台地整形区画1基、溝跡12条のほか多数のピットなどが検出されている。

**周辺の遺跡** 前述した萱田地区特定土地区画整理事業において、現在のゆりのき台の範囲にかかる白幡前遺跡・井戸向遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡・坊山遺跡・ヲサル山遺跡の6遺跡が大規模に調査され、旧石器時代～中世に至る遺構・遺物が多数確認されている。本遺跡の南には弥生時代後期～古墳時代中期を主体とする川崎山遺跡や池の台遺跡があり、新川の対岸にある村上地区には、村上込の内遺跡や浅間内遺跡、殿内遺跡など、奈良・平安時代を中心に各時代の遺構・遺物が多数確認され、これらの遺跡が所在する新川上流および辺田前・沖塚前低地に望む一帯は遺跡の密集地として認識される。



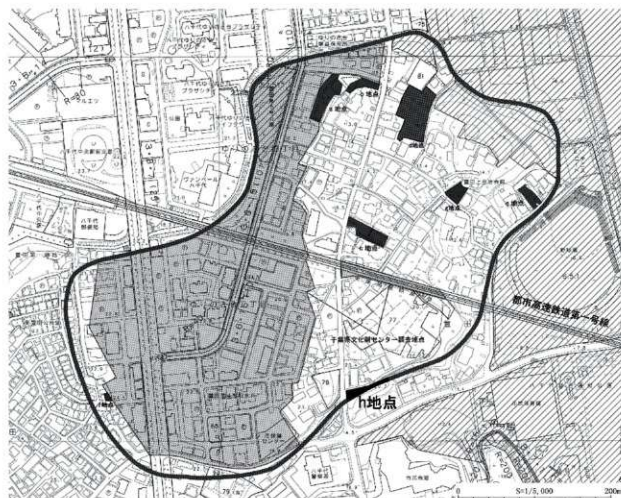
- 1 白幡前遺跡
- 2 井戸向遺跡
- 3 北海道遺跡
- 4 権現後遺跡
- 5 ツサル山遺跡
- 6 坊山遺跡
- 7 川崎山遺跡
- 8 池の台遺跡
- 9 南海道遺跡
- 10 ツサル山南遺跡
- 11 浅間内遺跡
- 12 村上込の内遺跡
- 13 白筋遺跡
- 14 根上神社古墳
- 15 殿内遺跡
- 16 境作遺跡
- 17 持田遺跡
- 18 正覚院塚
- 19 浅間下遺跡
- 20 村上宮内遺跡
- 21 村上向原遺跡
- 22 名主山遺跡
- 23 正覚院船跡

第1図 白幡前遺跡と周辺の遺跡



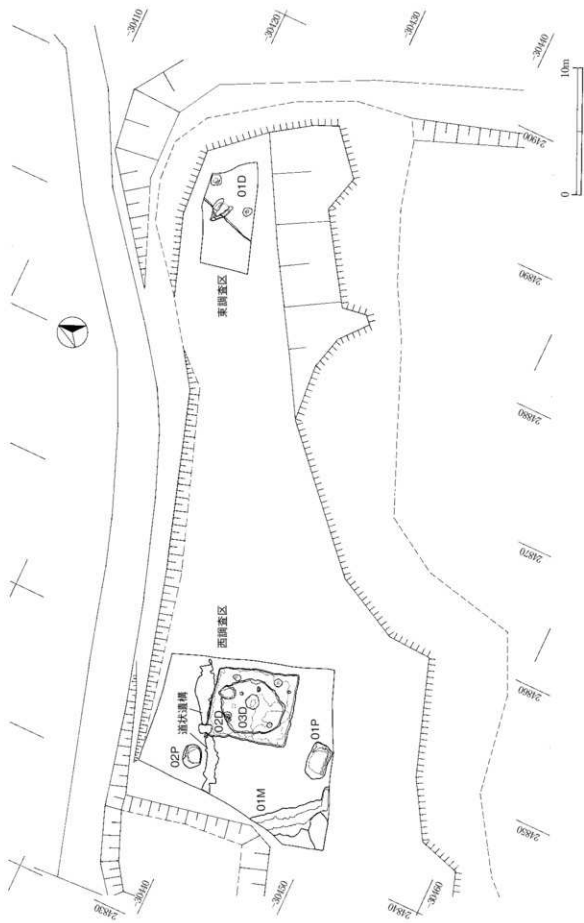
- 1 白幡前遺跡
- 2 井戸向遺跡
- 3 北海道遺跡
- 4 権現後遺跡
- 5 ツサル山遺跡
- 6 坊山遺跡
- 7 川崎山遺跡
- 8 池の台遺跡
- 9 南海道遺跡
- 10 ツサル山南遺跡
- 11 浅間内遺跡
- 12 村上込の内遺跡
- 13 白筋遺跡
- 14 根上神社古墳
- 15 殿内遺跡
- 16 境作遺跡
- 17 持田遺跡
- 18 正覚院塚
- 19 浅間下遺跡
- 20 村上宮内遺跡
- 21 村上向原遺跡
- 22 名主山遺跡
- 23 正覚院船跡

第2図 大正時代の白幡前遺跡周辺 (国土地理院発行5万分の1地形図を編集)



第3図 白幡前遺跡調査地点

地点	調査面積 (㎡)	遺構	遺物	調査期間	備考
a	1498	奈良・平安時代竪穴建物跡19棟、掘立柱建物跡6棟、土坑31基など	縄文土器、弥生時代、平安時代土師器、須恵器、施軸陶器	H13.5～9	本調査
b	214	奈良・平安時代土坑4基、時期不明溝跡2条	奈良・平安時代土師器、須恵器	H13.9.17～21	確認本調査
c	311	奈良・平安時代竪穴建物跡4棟、土坑12基、溝跡1条、近世溝跡2条	奈良・平安時代土師器、須恵器、輪羽口、土器片円盤、支脚、釘、鉄線、鉄滓、貝、陶器、馬骨	H20.3.6～31	本調査
d	90.15	縄文時代竪穴建物跡1棟、古墳時代竪穴建物跡2棟、奈良・平安時代溝跡1条、ピット4基、古墳時代～奈良・平安時代ピット12期	縄文土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製模造品、貝	H25.10.28～11.14	本調査
e	803	中・近世掘立柱建物跡1棟、ピット214基、台地整形区画1基、溝跡12条、ピット列2基、粘土貼りつけ遺構1基	中近世陶磁器類、土器、石製品、金属器、漆製品、木製品、須恵器、土師器	H26.7.31～9.30	本調査
f	8/97.99	奈良・平安時代土坑1基	奈良・平安時代土師器、須恵器	H28.1.8～14	確認本調査
g	48/428.71	—	—	H30.8.3～10	確認調査



第4図 白馬前遺跡の地点選構配置図



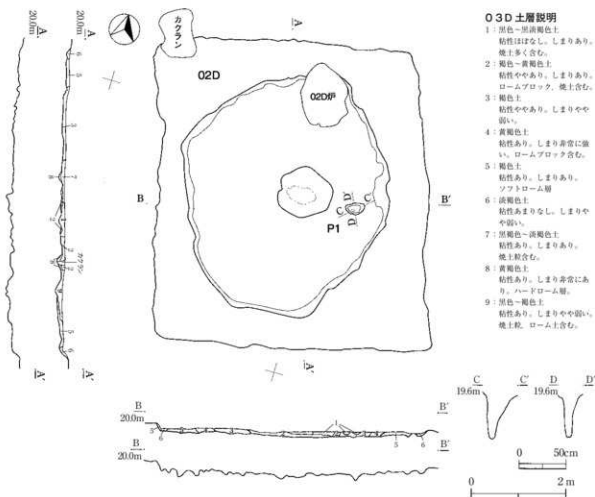
## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

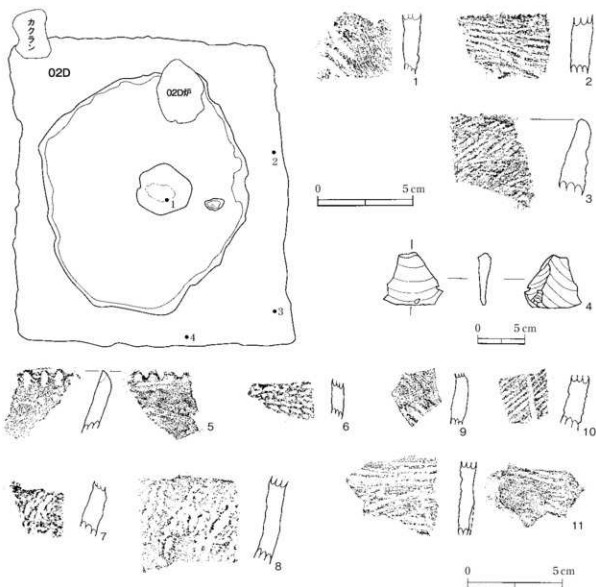
今回の調査において、縄文時代の竪穴建物跡1棟を検出した。また、整理作業の過程で、縄文時代の遺物を抽出したため、縄文時代の遺構である03Dと切り合い関係にある02D及び、周辺の確認面より出土したものを併せて以下に報告する。縄文時代の遺物は西調査区からのみの出土している。

#### 03D

**位置** 西調査区中央東寄り **確認面** 02D床面 **重複関係** 02Dに切られる **規模・平面形** 直径約5mの不整形な円形。柱穴は不明 **壁** わずかな立ち上がりが残るのみで、形状は不明 **床面** ハードローム層上面を地床とする。 **炉** 遺構ほぼ中央に作られる **覆土** 7層に分類。断面図中、5層は地山、6層は02Dに伴う層と考えられる。上部を02Dにより削り取られているため、覆土は非常に薄い。 **遺物出土状態** 遺構内からの出土遺物は縄文土器1点で明確な時期は不明である。本遺構を切る02Dの床面付近からも縄文土器及び黒曜石の剥片が出土。縄文土器は前期のものと考えられる。また、周辺の遺構確認面及び近接する01M、01Pの覆土からも、ほぼ同時期の遺物が出土している。 **所見** 覆土や遺構の形態などから縄文時代の竪穴建物跡と考えられるが、時期は不明である。



第5図 03D遺構実測図



第6図 03D・02D・西調査区出土縄文時代遺物

03D、02D及び西調査区出土縄文時代遺物観察表

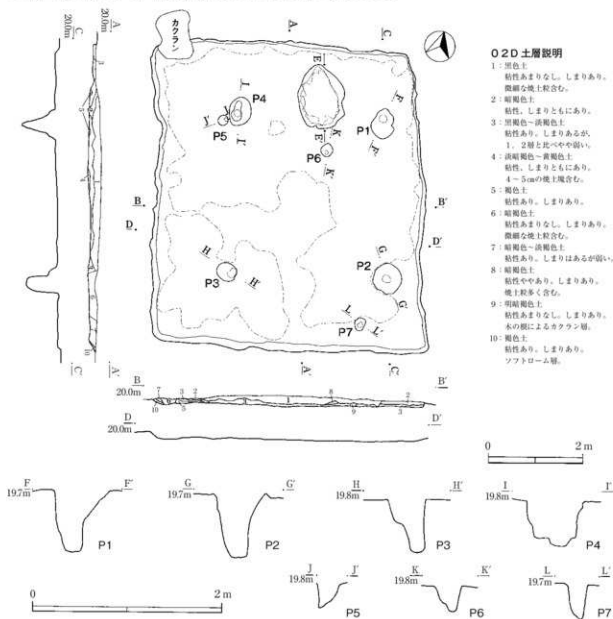
遺構	器種等	部位	計測値 (cm)			色調	胎土等	調整・文様等
			器高	口径	底径			
03D	1	深鉢 胴部	—	—	—	暗淡褐色	長石、石英	沈線文
02D	2	深鉢 胴部	—	—	—	明淡褐色	長石、石英	貝殻条痕文か
	3	深鉢 口辺部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	土器表面を口唇部まで縄文で施文し、その後一部を細い籠状の工具でなで整形
	4	割片	1.4 (最大長)	1.65 (最大幅)	0.4 (最大厚)	—	黒曜石	—
遺構外	5	深鉢 口辺部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	口縁部に刻み
	6	深鉢 胴部	—	—	—	暗淡褐色	長石、石英	押型文
	7	深鉢 胴部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	摺糸文か
	8	深鉢 胴部	—	—	—	暗褐色	長石、石英	摺糸文か
	9	深鉢 胴部	—	—	—	黒褐色	長石、石英、 黒色粒子	条痕文か
	10	深鉢 胴部	—	—	—	淡灰褐色	長石、石英	条痕文
	11	深鉢 胴部	—	—	—	黒色～淡褐色	長石、石英	表・裏両面に条痕文

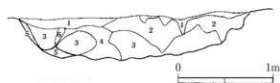
## 第2節 古墳時代

今回の調査において、古墳時代の遺構は竪穴建物跡2棟を検出した。

### 02D

位置 西調査区中央東寄り 確認面 ソフトローム層上面 主軸方向 N-18°-Wで西に振れている。  
 重複関係 03Dを切る 規模・平面形 4.4m×5.6m×0.2m以上 壁 緩やかに立ち上がる 床面 ソフトローム層を15cm程掘り込み地床とする。03Dとの重複により床の大半が地山ではないためか、全体的によく踏み固められている。 周溝 床面精査時に確認できなかったが、土層断面の観察から壁沿いに幅20cm程の溝が巡っていた可能性がある。 炉 中央北よりに作られる。床面から20cm程掘り込む。ピット P1～P4が主柱穴と考えられる。 覆土 9層に分層。遺構の上部は耕作により削られており、本来の深さは不明 遺物出土状態 縄文～奈良・平安時代の遺物82点が出土。 所見 出土遺物及び遺構の形態などから、古墳時代中期の竪穴建物跡と考えられる。

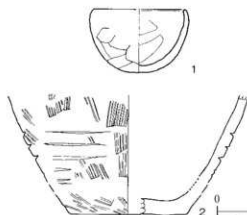


E  
198m

## 02D 炉土層説明

- 1: 褐色～黒褐色土 粘性なし。しまりなし。焼土混じる。  
 2: 褐色土 粘性なし。しまり非常にあり。焼土層。  
 3: 灰褐色土 粘性あり。しまり非常にあり。粘土ブロックか？  
 4: 明褐色土 粘性ややあり。しまりやや弱い。焼土粒含む。  
 5: 褐色～黄褐色土 粘性あり。しまりあり。ハードローム。  
 6: 黒褐色土 木の炭によるカクランか。

第8図 02D 炉土層断面図



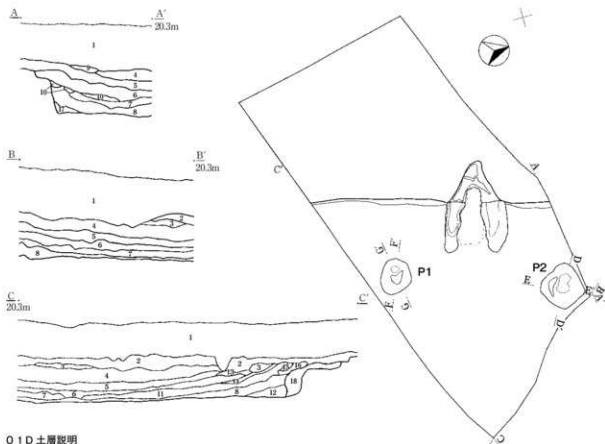
第9図 02D 出土遺物

## 02D 遺物観察表

器種等	部位	計測値 (cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 土師器 陶	口縁部 ～底部	5	(7.3)	2	暗褐色	長石、石英	内面ヘラナデ。外面ヘラ削り後ナデ調整。
2 土師器 甕	胴部下平 ～底部	—	—	(9.0)	淡暗褐色 ～暗褐色	長石、石英	縦、斜め方向のハケ目調整。焼成後、横方向の沈線を描す。
3 石製焼造品 反孔門板	完形	18 (最大長)	20 (最大幅)	0.25 (最大厚)	青緑色	滑石片岩	表面及び側面を研磨。その後、穿孔している。

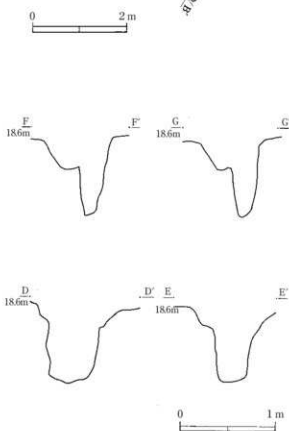
## 01D

位置 東調査区 確認面 ソフトローム層上面 主軸方向 N-73°-Wで西に振れている。規模・平面形 2.5m以上×2.5m以上×0.6m 壁 ほぼ垂直に立ち上がり 床面 ハードロームを地床としている。カマド 西壁を掘り込んで作られている。焚口から煙道の立ち上がり手前まで被熱により赤変・硬化している。袖部分はハードロームで土台を築き、その上に水分を含むと非常に脆くなるが、乾燥すると非常に硬くなる砂質土を盛って作られている。ビット P1, P2ともに主柱穴 覆土 15層に分類され、覆土の下層は焼土粒と炭化物を非常に多く含むことから、焼失建物の可能性もあるが、炭化した建物の構造物等は見つからなかった。遺物出土状態 覆土中からは古墳時代～奈良・平安時代の遺物 857点が出土。床面直上から古墳時代後期の土師器が出土している。また、カマド内には高坏脚部を転用した支脚が出土し、カマドの袖に埋め込まれる形で、土器片が出土している。また、確認調査時に、調査区東の崖面で、01Dに伴うと考えられる完形の土師器坏が露出していたので、併せて図示する。所見 出土遺物及び遺構の形態などから、古墳時代後期の堅穴建物跡と考えられる。

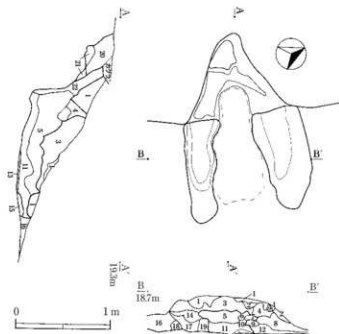


#### 01D土層説明

- |              |                                      |
|--------------|--------------------------------------|
| 1: 褐色～黒褐色土   | 粘性あり。しまりあり。砂混じりの層。                   |
| 2: 黒褐色土      | 粘性あり。しまりやや弱い。細かい焼土粒。炭化物粒含む。          |
| 3: やや明るい褐色色土 | 粘性あまりなし。しまりあり。                       |
| 4: 黒褐色土      | 細かい焼土粒多く含む。粘性あり。しまりあり。細かい焼土粒。炭化物粒含む。 |
| 5: 黒～黒褐色土    | 粘性あり。しまりあり。炭化物。焼土粒含む。                |
| 6: 黒褐色～褐色土   | 粘性あり。しまりあり。炭化物。焼土粒多く含む。ほぼ炭化物土焼土層。    |
| 7: 黒褐色～黒褐色土  | 粘性あり。しまりあり。厚紙～5mm程度の焼土粒多く含む。炭化物多く含む。 |
| 8: 褐色～淡褐色土   | 粘性あり。しまりあり。多量の焼土まじる。焼土と炭化物層。         |
| 9: 赤褐色～淡褐色土  | 粘性あり。しまりやや弱い。焼土多く含む。                 |
| 10: 赤褐色～淡褐色土 | 粘性あり。しまりやや弱い。炭化物混じりの焼土層。             |
| 11: 灰色土      | 粘性あり。しまりやや弱い。微細な焼土粒混じる炭化物層。          |
| 12: 淡褐色土     | 粘性あり。しまり弱い。焼土粒多く含む炭化物層。              |
| 13: 暗褐色土     | 粘性あまりなし。しまりやや弱い。焼土粒。炭化物混じる。          |
| 14: 暗褐色～黒褐色土 | 粘性ややあり。しまりやや弱い。焼土粒。炭化物粒含む。           |
| 15: 暗褐色土     | 焼土粒。炭化物粒含む。                          |
| 16: 淡褐色土     | 粘性あり。しまりやや弱い。焼土粒含む。                  |
| 17: 褐色～赤褐色土  | 粘性弱い。しまりやや弱い。焼土層。                    |
| 18: 褐色土      | 粘性あり。しまりあり。ソフトローム層。                  |



第10図 01D遺構実測図

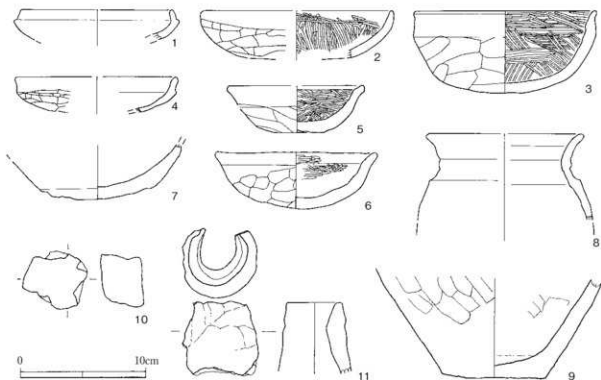


- 19: 灰褐色土 粘性はばなし。しりりあり。砂質土。  
 20: 褐色土 粘性あり。しりりあり。焼土粒含む。  
 21: 褐色土 粘性あり。しりり非常に強い。ハードローム層。  
 22: 暗褐色土 粘性ややあり。しりりやや弱い。焼土・炭化物多く含む。

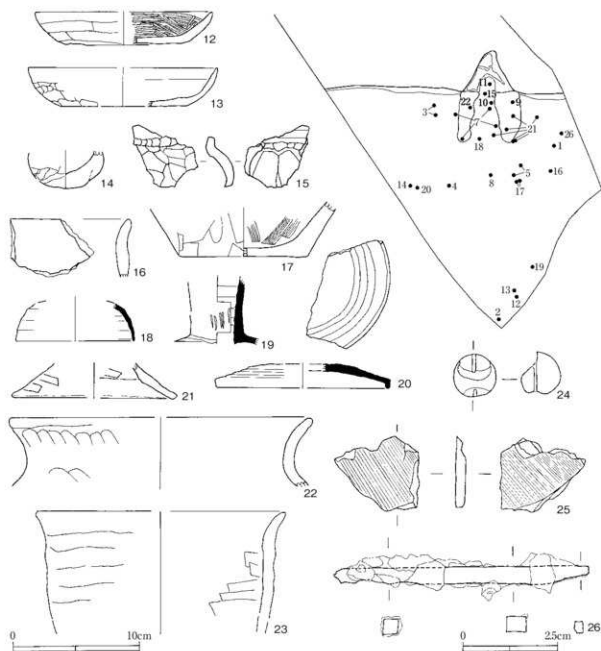
#### 01Dカマド土層説明

- 1: 暗褐色土 粘性ややあり。しりりやや弱い。  
 2: 暗褐色土 粘性あり。しりりあり。焼土・炭化物混じる。  
 3: 灰褐色土 粘性わずかにあり。しりりあり。わずかに炭化物混じる。  
 4: 暗褐色土 1層よりやや明るい土色。粘性あり。しりりあり。炭化物・焼土混じる。  
 5: 灰褐色土 粘性なし。しりり非常に強い。非常に砂質。焼土ブロック混じる。  
 6: 灰褐色土 粘性はばなし。しりりあり。炭化物・焼土粒含む。  
 7: 暗褐色土 粘性なし。しりりなし。焼土粒・焼土ブロック含む。  
 8: 暗褐色土 粘性ややあり。しりりあり。非常に砂質。  
 9: 暗褐色土 粘性なし。しりりなし。  
 10: 焼土層  
 11: 灰褐色土 粘性はばなし。しりりあり。土層ごとの層。  
 12: 暗褐色土 粘性あり。しりりあり。焼土・炭化物混じる。ローム土を突き回している。  
 13: 暗褐色土 粘性なし。しりりなし。焼土と炭化物の層。  
 14: 暗褐色土 粘性なし。しりりあり。砂質。  
 15: 褐色土 粘性あり。しりりあり。ロームブロック。  
 16: 暗褐色土 粘性あり。しりりあり。ローム粒混じる。  
 17: 暗褐色土 粘性あり。しりりあり。焼土粒・炭化物粒混じる。  
 18: 暗褐色土 粘性あり。しりり非常に強い。焼土粒・ロームブロック混じる。

第11図 01Dカマド実測図



第12図 01D出土遺物(1)



第13図 O1D出土遺物(2)

01D遺物観察表(1)

器種等	部位	計測値 (cm)			色調	粘土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 土師器 坏	口縁~胴部	—	(11.8)	—	外面:淡褐色 内面:黒色	長石	外面体部ヘラナデ。内面ミガキ, 黒色処理。
2 土師器 坏	口縁~胴部	—	(13.0)	—	黒色	長石	外面ヘラナデ。内面放射状のミガキ。
3 土師器 钵	口縁~底部 1/2	6.5	14.4	—	黒~黒褐色	長石, 石英	口縁部ココナデ。内外面ともヘラナデ後ミガキ調整。
4 土師器 坏	口縁~胴部 1/4	—	(12.8)	—	淡褐色	長石, 石英	口縁部ココナデ。体部外面はヘラ削り。内面ヘラナデ。
5 土師器 坏	口縁~底部	3.8	11.0	5.0	黒褐~褐色	長石, 石英	外面ヘラ削り後ミガキ調整小。内面ミガキ。
6 土師器 坏	完形	4.4	12.8	—	淡黒褐色	長石, 石英	口縁部ココナデ。外面ヘラナデ。内面ミガキ。一部に赤彩の痕跡あり。東側扉面にて表様。
7 土師器 壺	底部	—	8.0	—	赤褐色	長石, 石英	焼熱により脆くなっている。
8 土師器 壺	口縁~胴部	—	12.2	—	淡褐色	長石, 石英	口縁部ココナデ。外面胴部横方向のヘラナデ。焼熱により、表面が脆くなっている。
9 土師器 壺	底部	—	—	8.0	淡褐色	長石, 石英	内外面ともヘラナデ。

## 01M遺物観察表(2)

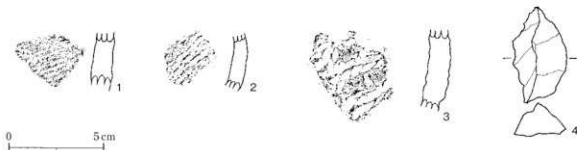
器種等	部位	計測値(cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高 (残存長)	口径 (残存幅)	底径 (残存高)			
10 土製支脚	体部	4.1 (残存長)	5.0 (残存幅)	4.6 (残存高)	赤褐色	長石、石英	焼熱により脆くなっている。
11 土製支脚		5.6 (残存長)	5.9 (残存幅)	5.9 (残存高)	淡灰褐色 ～赤褐色	長石、石英 雲母	焼熱している。高坪脚部を転用。
12 土師器 杯	口縁～底部 1.6	2.6	(14.0)	(8.6)	淡褐色	石英、長石 雲母	外面へう崩り、口縁周辺はヨコナデ。 内面はミギキ調整。
13 土師器 杯	口縁～底部 2.5	3.05	(15.0)	(9.8)	淡粉褐色	石英、長石 雲母	外面へう崩り、口縁周辺はヨコナデ。 内面ミギキ調整。
14 手捏ね土 器	胴部～底部			3.8	黒褐色	石英、長石	
15 土師器 埴	頸部～胴部				褐色	長石、石英	外面斜め方向の崩りの後、ナデ調整。 内面へうナデ。
16 土師器 壺	口縁～頸部				淡粉褐色	長石、石英	内外面ともにヨコナデ。
17 土師器 壺	底部 1/4			(10.0)	淡褐色	長石、石英	外面へう崩り。 内面ハナ目状のナデ。
18 須恵器 杯蓋	口縁～胴部	(9.4)			青灰色	長石	ロクロ整形。
19 須恵器 長頸壺	頸部				緑灰色	長石	ロクロ整形。縦方向の辻縷が入る。 頸部付け根にわずかに自然亀が見られる。
20 須恵器 杯蓋	口縁～胴部		(13.8)		淡灰褐色	長石、石英 雲母	ロクロ整形。頸部回転へう崩り。
21 土師器 高坪	脚部～高坪 7.8			13.0	黒～淡褐色	長石、石英	外面へうナデ。内面横方向のへうナデ。
22 土師器 壺	口縁～頸部		(23.6)		淡褐色	長石、石英	外面口縁部ヨコナデ。体部縦方向のナデ。 内面横方向のナデ。
23 土師器 壺	口縁～頸部		(20.0)		黒色～淡褐色	長石、石英	内外面ともにヨコナデ。焼熱により表面が脆くなっている。 輪痕み粗残す。
24 石製品 瓦		1.1	1.1	1.2	黒褐色		材質等不明。数珠か?
25 石製模造品 未製品		2.0 (最大長)	2.3 (最大幅)	0.25 (最大厚)	青緑色	滑石	研削により薄い板状に加工している。
26 鉄製品 釘か		6.7 (最大長)	0.5 (最大幅)		黒～茶褐色		

### 第3節 奈良・平安時代

今回の調査において、奈良・平安時代の遺構として溝跡1条を検出した。

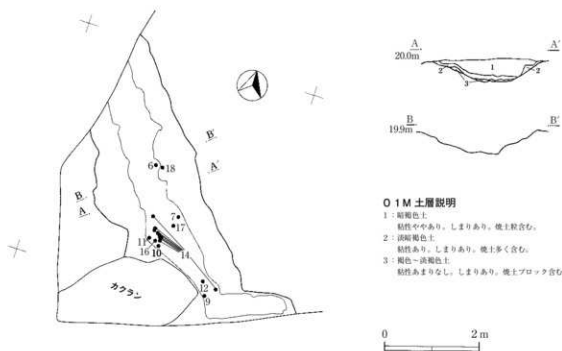
#### 01M

位置 西調査区南西 確認面 ソフトローム層上面 規模・平面形 幅5m×長さ2m以上×深さ0.45mで、調査区南端で東に屈曲する。壁面 緩やかに立ち上がる。遺構東側がやや急な角度になる。床面 ほぼ平坦である。覆土 3層に分類される。2層により溝が1度ほは埋まった後に、掘りなおされている。遺物出土状態 覆土から縄文～奈良・平安時代の遺物が409点出土。遺物の大半は奈良・平安時代の遺物である。縄文時代～古墳時代の遺物は流れ込みと考えられるが、奈良・平安時代の遺物については溝中に廃棄されたと考えられる。所見 遺物の出土状況などから、奈良・平安時代以前の溝跡と考えられる。

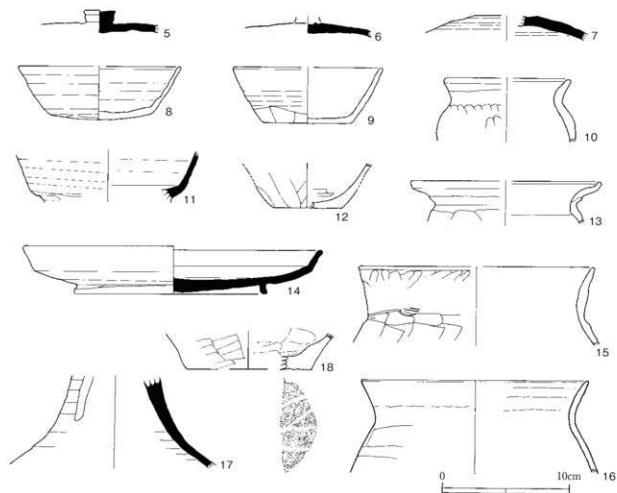


第14図 01M出土遺物(1)





第15図 0 1M遺構実測図



第16図 0 1M出土遺物(2)

## 01M遺物観察表

器種等	部位	計測値 (cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 縄文土器 深鉢	胴部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	具殺染文か。
2 縄文土器 深鉢	胴部	—	—	—	暗淡褐色	長石、石英	縄文。
3 縄文土器 深鉢	胴部	—	—	—	淡黒褐色	長石、石英	磨糸文か。
4 滑石原石		5.1 (最大長)	2.9 (最大幅)	2.0 (最大厚)	青緑色	滑石	
5 須恵器 坏蓋	皿～胴部	1.7	—	—	青灰色	長石、石英	外面へう割り。
6 須恵器 坏蓋	胴部	—	—	—	青灰色	長石、石英 骨針状物質	外面へう割り。フツミ部分は剥離している。
7 須恵器 坏蓋	胴部	—	—	—	灰白色	長石、石英 雲母	外面へう割り。
8 土師器 環	口縁～底部	4.2	(28)	(8.0)	暗橙褐色	長石、石英 雲母	ロクロ成形。底部へう割り。
9 土師器 環	口縁～底部	4.4	(11.7)	(7.2)	淡褐色	長石、石英	ロクロ成形。外面下部と底面へう割り。
10 土師器 環	口縁～胴部	—	(10.0)	—	黒褐色	長石、石英 雲母	口縁部ヨコナデ。体部へうナデ。
11 須恵器 高台付環	胴部	—	—	—	灰白色	長石、石英	ロクロ整形。体部下端をへう割り。
12 土師器 壺小	底部	—	—	(5.4)	淡褐色	長石、石英	外面へう割り。内面へうナデ。
13 土師器 壺	口縁～胴部	—	(15.0)	—	暗褐色	長石、石英	ヨコナデ。胴部に輪積み痕あり。
14 須恵器 壺	口縁～底部	3.8	23.6	15.2	淡青灰色	長石、雲母	ロクロ成形。胴部西から底部については回転へう割り。
15 土師器 壺	口縁～胴部	—	(18.6)	—	暗褐色	長石、石英	口縁部ヨコナデ。内外面ともへうナデ。
16 土師器 壺	口縁～胴部	—	(18.0)	—	暗橙褐色	長石、石英	口縁部ヨコナデ。胴部横方向のへうナデ。胴部外面はへう割り。
17 須恵器 高環	脚部	—	—	—	淡青灰色	長石、雲母	ロクロ成形。透かし孔あり。
18 土師器 壺	底部	—	—	(10.2)	褐色～橙褐色	長石、石英 雲母	内面へうナデ。外面へう割り。底部に木炭痕。

## 第4節 中・近世

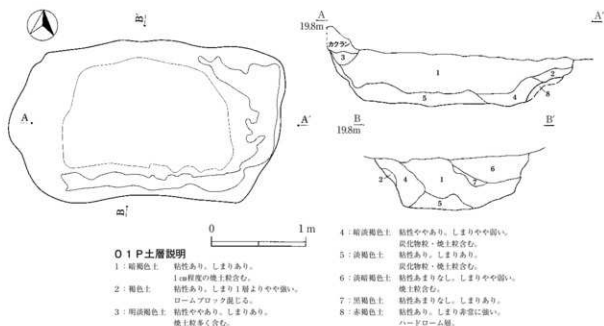
中近世の遺構として、土坑2基と道状遺構1基を検出した。遺構に伴うと考えられる遺物がなく、明確な時期の特定はできなかった。

## 01P

位置 西調査区南西 確認面 ソフトローム層上面 規模・平面形 2.9m×1.65m×0.5mの不整形な隅丸長方形 壁 緩やかに立ち上がり、東側でわずかにテラス状の平坦面を有する。底面 ハードロームを20cm程掘り込み、平坦な面を作る。覆土 7層に分類される。堆積状況から5層堆積後に掘り返されているようである。遺物 縄文土器と奈良・平安時代の土師器の計17点が出土した。遺物は流れ込みと考えられる。所見 遺構の形状や覆土などから近世以前の土坑と判断した。



第17図 01P出土遺物



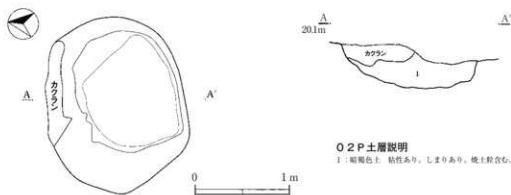
第18図 01P遺構実測図

01P遺物観察表

器種等	部位	計測値 (cm)			色調	胎土	調整・文様等
		器高	口径	底径			
1 縄文土器 深鉢	口辺部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	竹管文。
2 縄文土器 深鉢	胴部	—	—	—	暗淡褐色	長石、石英	縄文。
3 縄文土器 深鉢	胴部	—	—	—	黒色	長石、石英	縄文。
4 土師器 坏蓋	口縁部	—	(15.0)	—	褐色	長石、石英	ロタロ成形。
5 土師器 坏	胴部～底部	—	—	(9.0)	外面：淡褐色 内面：黒色	長石、石英	内面ミガキ長石、外面回転ヘラ削り。

02P

位置 西調査区北西 規模・平面形 1.85m×1.5m×0.5mの楕円形 壁 ゆるやかに立ち上がる  
底面 平坦である。覆土 1層に分類した。短期間に埋められたと考えられる。遺物 遺物の出土  
は見られなかった。所見 遺構の形状や覆土から近世の土坑と判断した。

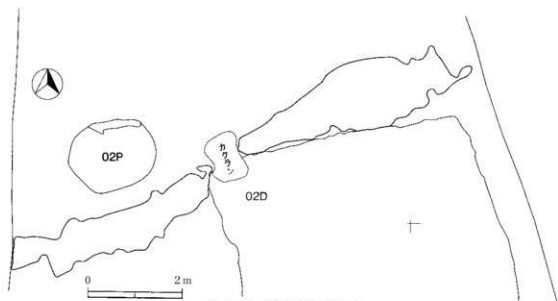


第19図 02P遺構実測図

### 道状遺構

位置 02Dと02Pの間を抜け、西調査区を東西方向に走る 確認面 ソフトローム層上面 規模・平面形 西調査区内において10.5m×15mの範囲で踏み固められ硬化した面が遺構検出面上にみられる。

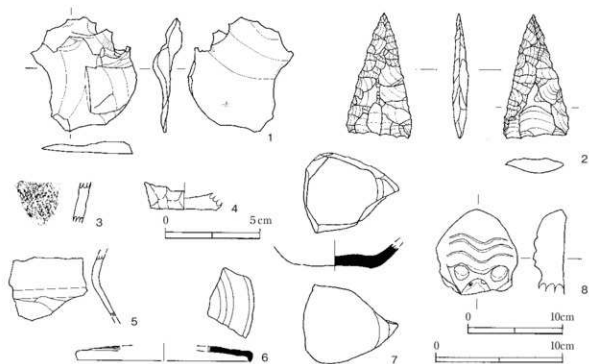
所見 02Dとの切り合い関係が不明であるが、東調査区の東側の崖沿いに残る赤道に接続するものと考えられることから、近世以前と判断した。



第20図 道状遺構実測図

### 第5節 遺構外出土遺物

遺構を検出する過程において、表土中及び遺構確認面上からも遺物の出土が見られたことから、下記に報告する。また、確認調査時出土した遺物についても、一部ではあるが併せて報告する。



第21図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

遺構	器種等	部位	計測値 (cm)			色調	胎土等	調整・文様等
			器高 (最大長)	口径 (最大幅)	底径 (最大厚)			
確認調査	1 銅片		8 (最大長)	5.6 (最大幅)	0.9 (最大厚)	黄緑色	注貫貝岩	
	2 石鏝		3.3 (最大長)	1.7 (最大幅)	0.4 (最大厚)	黒色	黒曜石	
西調査区	3 弥生土器	胴部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	細い燃糸文。
東調査区	4 手捏ね土器	口縁～底部	1.4	(4.0)	3.5	淡褐色	長石、石英	
西調査区	5 土師器 罌	口辺部～胴部	—	—	—	淡褐色	長石、石英	内面ヨコナデ、外面口辺部～胴部ヨコナデ、胴部へラ削り。
東調査区	6 須恵器 坏	口縁部	—	(14)	—	淡青灰色	長石、石英、雲母	ロクロ成形。
	7 須恵器 坏	底部	—	—	(6.0)	暗褐色	長石、石英、骨針状物質	ロクロ成形。底部糸切り。
西調査区	8 泥メンコ (河童)		—	2.0 (最大幅)	0.8 (最大厚)	淡褐色	長石	

### 第3章 成果と課題

今回の調査により、縄文時代の竪穴建物跡1棟、古墳時代の竪穴建物跡2棟、奈良・平安時代の溝跡1条、中近世の土坑2基、近世遺状遺構1条を検出した。

これまでの白幡前遺跡の調査においては、縄文時代の竪穴建物跡はd地点の1棟のみで、今回で2例目である。古墳時代については、北側の寺谷津沿いに後期の竪穴建物跡が見つかったのみであり、新たに遺跡南端の池ノ谷津沿いで竪穴建物跡を検出したことは、対岸に川崎山遺跡・池の台遺跡などの古墳時代集落が展開していることから、新川上流域における古墳時代集落の変遷を考える上で、貴重な資料である。また、中期の竪穴建物跡自体が今回新発見である。奈良・平安時代については、本調査地点においては当該時期の遺物が廃棄された溝跡が見つかったのみである。なお、調査区外ではあるが、調査区南側の崖面に残されていた樹木の根に保護されるように遺物が残されており、現在の崖面より先まで緩斜面が続き、遺構が展開していたと考えられる。

#### 参考文献

- 八千代市史編さん委員会 (1978年) 『八千代市の歴史』
- 財千葉県文化財センター (1991年) 『八千代市白幡前遺跡』
- 財千葉県文化財センター (1994年) 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡』
- 八千代市教育委員会 (2007年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』
- 八千代市教育委員会 (2009年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』
- 八千代市教育委員会 (2009年) 『千葉県八千代市白幡前遺跡 c 地点』
- 八千代市教育委員会 (2015年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成26年度』
- 八千代市教育委員会 (2016年) 『千葉県八千代市白幡前遺跡 e 地点』
- 八千代市教育委員会 (2016年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成27年度』
- 八千代市教育委員会 (2016年) 『千葉県八千代市白幡前遺跡 d 地点』
- 八千代市教育委員会 (2017年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成28年度』
- 八千代市教育委員会 (2020年) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 令和元年度』



調査区全景 調査前状況



西調査区遺構検出状況



西調査区全景



03D全景



03D炉



02D全景



02D炉



02D炉土層断面



01D全景



01Dカマド周辺遺物出土状況



01M全景



01M土層断面



01P全景



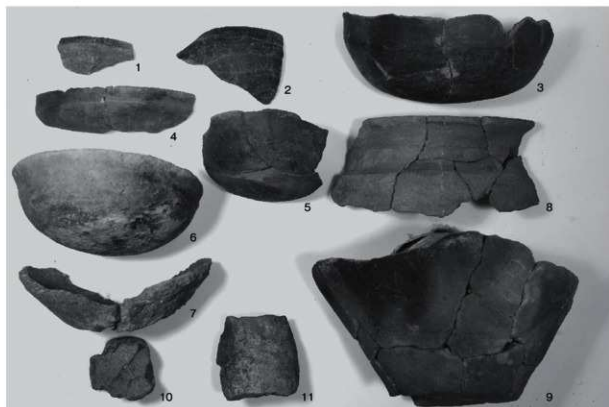
02P全景



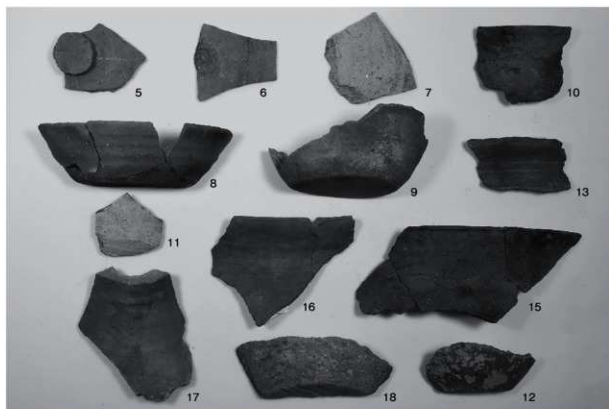
道状遺構西側



道状遺構東側



O1D出土遺物



O1M出土遺物(1)



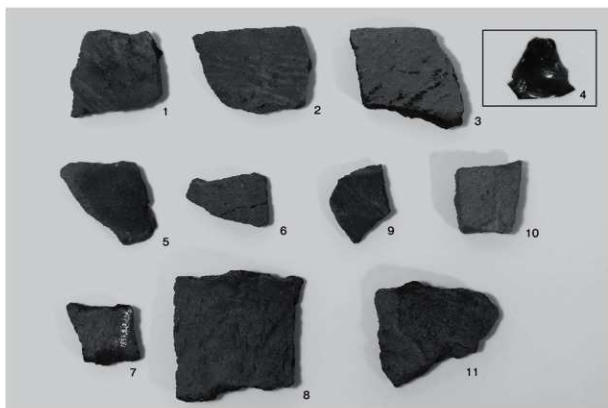
図版 4



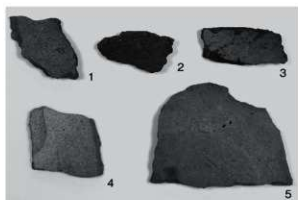
01M出土遺物 (2)



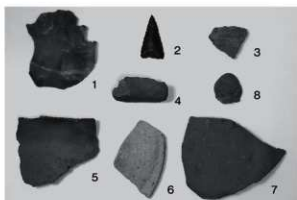
02D出土遺物



03D・02D・西調査区出土縄文時代遺物



01P出土遺物



遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しらはたまえいせきえいちてん							
書名	千葉県八千代市 白幡前遺跡h地点							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編者名	宮下聡史							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047 (483) 1151代表							
発行年月日	令和2年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白幡前遺跡	宮田字上ノ台2127番 1 2126番	12221	185	35度 43分 31秒	140度 6分 29秒	20190415 ～ 20190628	300	宅地造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白幡前遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器,弥生,古墳, 奈良・平安	縄文時代竪穴建物跡1棟, 古墳時代竪 穴建物跡2棟, 奈良・平安時代溝跡1 条, 中近世土坑2基, 遺状遺構1条	縄文土器, 古墳時代土師器, 石製模造品, 奈良・平安時代 土師器・須恵器	
要 約	調査において, 縄文時代の竪穴建物1棟, 古墳時代の竪穴建物跡2棟, 奈良・平安時代の溝跡1条などを検出した。奈良・平安時代が主体の遺跡であるが, 谷津を臨む遺跡の南端部分で, これまで検出されていない古墳時代中期の遺構を検出したことで, 谷津の対岸に所在する古墳時代集落との関係性が浮かび上がってきた。				

## 千葉県八千代市 白幡前遺跡 h 地点 — 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行 日    令和2年3月31日  
 編 集    八千代市教育委員会 文化・スポーツ課  
           〒276-0045 八千代市大和田138-2  
           TEL 047-481-0304  
 発 行    株式会社オカムラホーム  
 印 刷    金子印刷企画